

資料「渋沢栄一と長島記念館を結ぶ道」

熊谷市立江南文化財センター 山下祐樹

第1章 渋沢栄一と関連資料

近代日本経済の父といわれる渋沢栄一は天保11年（1840）深谷市の血洗島の農家の家に生まれた。幼い頃から家業である藍玉の製造・販売・養蚕を手伝い、父市郎右衛門から学問の手ほどきを受けた。7歳になると下手計のいとこの尾高惇忠のもとへ論語をはじめとする学問を習いに通った。20代で倒幕思想を抱き、惇忠や惇忠の弟の長七郎、いとこの渋沢喜作らとともに、高崎城乗っ取りを計画したが、長七郎は京都での見聞からこれに反対し計画は中止された。その後、喜作とともに京都へ向かい、一橋（徳川）慶喜に仕官することになった。一橋家で実力を発揮した栄一は27歳の時、慶喜の弟徳川昭武に随行し、パリ万国博覧会を見学し、欧州諸国の実情に触れた。帰国すると日本で最初の合本（株式）組織「商法会所」を静岡に設立し、その後明治政府の大蔵省に仕官した。栄一は富岡製糸場設置主任として製糸場設立にも関わり、義兄の惇忠が初代場長に就任した。大蔵省を退職後、一民間経済人として株式会社組織による企業の創設・育成に力を入れるとともに「道德経済合一説」を唱え、第一国立銀行をはじめ、約500もの企業の設立に関わったといわれる。また約700もの社会公共事業、福祉・教育機関の支援と民間外交にも熱心に取り組み、数々の功績を残した。



渋沢栄一
(1840-1931)

国立国会図書館
「近代日本人の肖像」より

(画像) NHK 大河ドラマ「青天を衝け」
「血洗島獅子舞」

根岸家に関連した渋沢栄一の主な記述資料

公益財団法人渋沢栄一記念財団では情報資源センターを設けて、渋沢栄一に関連した古文書や手記、印字資料などをデジタルアーカイブスし、著作権等の諸条件をクリアした資料をオープンデータとして公開している。インターネット上のアーカイブスでは、関連した用語を検索することで、必要に応じた記載情報を閲覧することができる。このシステムを利用し、渋沢栄一の周辺と、熊谷地域及び根岸家との関連について情報収集が可能である。



第2章 長島記念館と渋沢家の周辺

長島記念館は、長島家の旧邸宅として主屋や石蔵の建造物が並び、2019年に熊谷市の名勝に指定された。所有している美術品も多く、その中には渋沢栄一が直筆した掛軸や額があり、年間を通じて一般公開されている。

長島家は、江戸時代中期以降の商家として知られ、大正時代には、当主の長島甚助（1864～1941）が旧吉見村の村長となり、渋沢栄一らと協力し、熊谷周辺の製糸産業などを進めた。長男の長島恭助（1901～1992）は、県立熊谷中学校（現・熊谷高等学校）、山口高等商業学校（現・山口大学）などを経て、武州銀行に入行。その後、埼玉銀行（現・埼玉りそな銀行）頭取・会長などを歴任し埼玉県経済界の発展に貢献したほか、恭助は渋沢の影響を受け、育成事業に尽力した。

恭助が入行した武州銀行は、渋沢栄一が設立に関わった熊谷銀行と黒須銀行が合併した銀行で、渋沢の甥である尾高次郎が初代頭取となった。後に埼玉銀行となり、あさひ銀行を経て、現在の埼玉りそな銀行となった。この銀行の経過と恭助の生涯を照らし合わせると、渋沢栄一と長島家を結ぶ道が見えてくる。



洪沢栄一への意識

跡取りの少年に年始回りをさせる風習は、県下の地主にはみんなあったらしく、洪沢栄一翁も12、3歳のころに母のいつけで父の名代として本庄まで年始に行っている。

また翁のお孫さんにあたる洪沢秀雄氏も、その随想のなかで、中学時代に先生や親戚の年始回りをやったことを書いている。

剣道のほうも、2年のときに父の手ほどきを受けて始めたが、チビだった私は、一人前の試合は無理だったので、正月の道場開きの前座に、馬庭念流の型をやるのがつねだった。

この年の私は、病気で死にそこなったり、成績が2番に落ちたりした。どうやら、私にとって厄年だったらしい。(51ページ)

「熊谷製糸」の展開

父の成功した事業の一つに「熊谷製糸」がある。

たぶん、明治末期のことだったと記憶するが、父が熊谷に「熊谷製糸株式会社」を創立して社長になった。規模は釜数150ぐらいのものだったが、それでも従業員は男女合わせて200名ぐらいいた。

場所は熊谷駅から、わずか2、3分のところで、現在、「魚勝」という料理屋になっているところがその跡地である。

この工場敷地が沼地であった。「長島はあんなところを買って馬鹿だ」といわれたそうであるが、おそらく父のことだから安く買ったのだろう。ともかく、その沼地に「水どめ」して工場を建てたのである。

それに、ここは水がよかった。製糸工場で使う水は軟水でなければだめで、硬水を太陽に晒して軟水にして使うのが普通だったが、この水は、軟水だったので、そんな手数がかからなかった。これも、父らしい着眼である。

埼玉県は、古くから養蚕が盛んであった。そのため、繭を原料とする製糸業も発展した。そして、大規模な機械製糸工場が明治30年代から建設されるようになったが、ここで注目されることは、県内の豊富な原料繭に着目して、他県からの資本進出が目ざましくなったことである。

とくに、長野県からへ(ヤマイチ)、片倉(⊕マルジュウ)などの大手製糸業者がいつせいに進出してきた。

こうした県外からの資本の流入をみて、父はだいぶ考えたらしい。

「県外資本が県内の原料を活用して大もうけする。これを指をくわえて見ている手はない。よし、それならわしが地元資本で挑戦してやる」と。

かくて父は敢然として立ち上がった。自分の金で、地元資本として県外資本に一戦を挑み、その結果が熊谷製糸の誕生となったのである。

そして、父のチャレンジ精神は、やがて見事に実を結ぶことになる。第一次世界大戦のなかごろから、戦後にかけて生糸の価格は暴騰し、輸出も大幅に増加した。この生糸景気を満喫して熊谷製糸は最盛時の大正8年ころには10割という高配当を(2回)したほどもうけた。(同上、109～111ページ)

熊谷製糸は父の死後、親戚の舞原が社長になってやっていた。私も一役員として帳簿の整理を手伝ったり、繭の買付時期にはそれを見回ったりしたこともある。だから、繭や製糸のことについては銀行内で私が一番詳しいといわれていた。

熊谷製糸の最初の工場は、熊谷の大火で焼失したが、端堺期であったので、被害は最小限度ですんだ。本社工場は敷地の広い石原に移転し、その後、吹上に分工場を建設した。

第2次世界大戦が始まってからも石原で操業をつづけていたが、昭和18年戦局の厳しい中で、企業整備法の適用を受け姿を消した。

父は熊谷製糸の経営に当たるかたわら、忍商業銀行の吹上支店長もやっていた。当時、田舎の銀行の支店長は地元の有力者が頼まれて引き受けるケースが大部分だったので、父の場合もそうだったのだろう。支店長になったのは、私が生まれて間もなくのことだったというから、熊谷製糸の創立以前から銀行通いをしていたことになる。(同上、112～113ページ)

明治・大正期の小作争議と長島家

「この村には著名な青山の殿様地主根岸伴七翁あり、伴七と並び称された大地主長島甚助、この2大地主を先頭に吉見郷一帯の地主相手の小作争議が自然発生的にはじまった。」(『大里村史』)

この内容からもわかるように、根岸家と私の家とが2大地主としてねらわれた。そして、このデモ隊が、ある夜、赤旗を先頭に、わが屋敷へ押しかけてきたのだ。

このとき、父は護身用として1丁のピストルを警察の許可をうけて座布団の下に忍ばせていたというが、そのことははっきりしない。しかし、かねて泥棒除けにピストルをもっていたこともあるから、ほんとだったかもしれない。ともかく長島家も地主として小作争議の洗礼をうけたのである。

この年、小作争議の洗礼をうけたのは吉見村の地主ばかりではない。県下でも児玉郡共和村、比企郡八和田村、南埼玉郡潮止村などにも発生している。

当時、小作争議が多発したことは、一つの時代的変革期における風潮であったのではなからうか。深刻な不況の産物ともいえる。

父は、たしかに理財の道には長じていたが、地主だからといって、それほど階級意識はもっていなかった。地主のなかには小作人から苛酷な収奪をした者もあったが、父は小作人との間に十分のコミュニケーションをやっていた。その証拠に、洪水でも起こると、まっ先にかけて水じまい(水害の用意)をしてくれるのが一部の小作人たちだった。

また、洪水のときなど米倉を開いて、被害をうけた小作人たちに米の配分をした。炊き出しをして握り飯を船に積んで配ったりもした。

「取り立て日」といって、村別に年貢を納める日を割り当てていた。その日は飯を食べてもらうことにしてあったので、年貢米を車に積んで運んでくる小作人は、喜んでいた。

「長島へ行けば米の飯のごちそうになれる」というので、一家全部でやって来る人もあった。

わが家では番頭はいなかった。小作人との交渉はすべて主人が自ら行い、留守のときには主婦が代行していた。

私の知っている限り、小作人との大きなトラブルはなかった。(同上、114～117ページ)

洪沢栄一の防災意識

財界の大御所、洪沢栄一翁(当時84歳)は、震災をさして「天譴(てんけん)」といった。しかし、この言葉に耳を傾けた者はどのくらいいたろうか。大正9年のガラ以来慢性化した不況を、整理する絶好の機会であったにもかかわらず、逆に財界救済の名のもとに「震災手形」が乱発された。一時は復興

景気らしいものが出たが、それが消えた後に残ったものは震災手形の処理問題であった。この処理を動因として爆発したのが昭和初頭の金融恐慌である。(164ページ)

武州銀行誕生の経緯

親の決めてくれた就職先として私は軽い気持ちで武州銀行に入ったので、入行早々の私には武州銀行がどんな趣旨のもとに設立されたものかいっこうにわからなかった。

しかし、日が経つにつれて、武州銀行は他の銀行とちがった重要な使命をもっていることに気がついた。

私にとっては「育ての親」ともいえる武州銀行が、どんないきさつで誕生したか。そのへんの事情についてふれておく。武州銀行が誕生した大正7年は、内外ともに多事多難な年であった。(165ページ)

そのころ、埼玉県には本店銀行58行、支店27が各地に群雄割拠していた。その大部分は資本的基盤が弱く、また横の連係動作もほとんどなかったため、資金の調整機能に欠けていた。このため、ひとたび経済変動の波が起ると大混乱に陥る危険があった。

こうした金融上の危険をなくすためには、強力な基盤をもつ県の中央銀行を設立する必要がある、との声が有力者の間に高まってきた。

当時、産業組合法(明治33年公布)にもとづく産業組合が県下の各町村にできて、銀行と同じように預金や貸出の業務をやっていたが、組合の余裕金を安心して預けられる機関銀行がなく、その必要性が痛感されていた。(166～167ページ)

これに対して岡田知事は、「単に信用組合の機関銀行をつくるだけでは先行き不安であるから、現在県内にある多くの銀行を統合して、強力な銀行をつくったほうがよい」と主張したのであった。(168ページ)

岡田知事は、有力銀行の首脳が合併に反対の意向をみせているだけに合併推進は無理と判断して、飯野議員の意見に賛成、ここに新銀行の設立が実現することとなったのである。

岡田知事は直ちに新銀行の設立に着手し、計画は順調に進んで、大正7年11月6日の創立総会で新銀行が武州銀行の名で誕生した。資本金は500万円、初代頭取には東洋生命保険社長の尾高次郎氏が就任した。(170ページ)

武州銀行の設立によって、その後、県下銀行の整理統合が急速にすすんだため、昭和初期に起こった金融恐慌にも県下の金融界は大した動揺を来たさずにすんだ。

武州銀行の設立には、渋沢栄一翁が埼玉県の金融界の将来を心配して岡田知事に銀行統合をすすめ、その具体策を指導したといわれている。

名知事といわれた岡田忠彦氏は、在任中に多くの功績を残したが、武州銀行の創立もその一つとして、いまも語り伝えられている。(170～171ページ)

資料2 長島恭助『遺稿 新・わたしの人生ノート』1993

ソロバンより機能性を選択

都市銀行入りが実現すると、もう一つは地方銀行協会と袂を分かつたねばならないことである。地方銀行協会というのは、もともと埼玉銀行の初代頭取の永田甚之助さんがつくったものである。(139ページ)

私は旧武州銀行以来、永田さんの薫陶をうけており、当時の苦労話も目の当たりにしている。旧武州銀行は渋沢栄一(青淵)

翁の流れを汲み、道徳と経済の合一思想に貫かれた筋金入りの人びとによって経営が引き継がれ、永田さんは埼玉銀行が設立されたときに、専務から初代頭取になった。

繰り返すまでもなく、敗戦後の経済変化は昭和21年2月、幣原内閣の金融緊急措置令等によって金融封鎖、新円交換が行われるなど、国民生活を根底から動揺させ、道義は地に墮ち、貯蓄心など消し飛んだかに見えたが、永田さんは揺籃期の埼玉銀行の経営に寝食を忘れて打ちこんだ人である。(142ページ) (各引用ではそのままの表記及び一部補整)

補稿「渋沢栄一の衣鉢を継ぐ人」

竜門社埼玉支部事務局長(当時) 田沼 利将

竜門社の理事に就いておられた長島恭助氏が、去る9月22日に卒然とこの世を去った。享年91歳。奇しくも青淵翁と同じ歳月を生きたことであった。それかあらぬか、旧知の方々から相次いで寄せられた追悼の言葉の中に、長島氏は青淵翁の衣鉢を継ぐ人であったとか、翁に匹敵するような人格者だったという表現が多くみられることとなった。

もっとも、ここ埼玉の地は、郷土の生んだ偉人青淵翁に対する尊崇の念、あるいはもっと身近に親しみを込めた敬愛の情の非常に濃い土地柄で、折りにふれて青淵翁が引き合いに出されることが少なくない。

昭和59年に長島氏が浦和市の名誉市民に推挙された際の祝賀会の席上で、地元選出の国会議員氏から、現代に生きる渋沢栄一であると持ちあげられたことがあった。帰宅の車中で、当人がその祝辞に大いに照れていたことが、今更のように思い起こされる。

誠の一字を生活信条とされたその生涯は、論語の「忠恕(まごころとおもいやり)」の精神を、身をもって実践したものであり、その精神はいつまでも生き続け、私たちの行く手を指し示してくれるに違いない。

それにしても長島氏の一生を顧みたとき、青淵翁との因縁に結ばれた事象の余りに多いことに驚かされるのである。

氏は、執務室に翁の染筆になる「道徳銀行」の扁額を掲げ、その精神を銀行経営の理念としておられたのであったが、そもそも長島氏が社会人となって初めて奉職した武州銀行の創設に、青淵翁が深く関わっているのである。

話は変わるが、青淵翁が初代会長としてその発展に尽力された埼玉県人会には、時代が下って長島氏が副会長、また名誉会長として運営に参画され、さらに本県出身の学生の修学を奨励するために翁が会頭となって発足した埼玉学生誘掖会では、長島氏も没年までの30余年を会計担当理事として過ごしてきた。

また、日比谷公会堂より4年前に開館し、本県近代化のシンボリック的存在であった埼玉会館の建設に際しては、翁が率先して浄財を寄付し、その竣工式では来賓として壮者をしのぐ雄弁を振るったのであったが、長島氏は会館活動を民間ベースで支援する団体の会長を最後まで努めるなど、翁と長島氏の深い絆は枚挙に遑がない。

昭和58年の秋、渋沢栄一翁の生家が、「渋沢国際会館」に生まれかわって、その開館式に同行した際、長島氏は玄関先に掲げられた扁額を指差し、何と読むか解りますか、と私に尋ねられた。「不踰矩(のりをこえず)」、曰く矩をこえず。無言のうちに私は諭されたのでしよう。(同上掲書、229～233ページ 一部省略)

(埼玉県熊谷市小八林「長島記念館」 令和3年6月23日)